

1 学校教育目標
一人一人の個性を大切にし、きめ細やかで専門性の高い教育活動を通して、自立と社会参加に向けて、豊かな人生を切り拓く児童生徒を育てる。

2 本年度の重点目標
<p>(1) 安全・安心で優しい教育環境づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒が安心して学び、生活できる教育環境の整備(危機管理体制の構築、安全教育・健康教育の推進) ・自尊心を育み、相手を思いやる豊かな心の育成と人権教育の充実 <p>(2) 可能性の伸展と一人一人が輝く授業づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肢体不自由教育校及び寄宿舎設置校として魅力溢れる特色ある学校づくりの推進 ・自立活動の充実(適切な実態把握に基づいた系統的な授業づくり)と積極的なICT活用による学習支援の工夫 <p>(3) 自立と社会参加につなぐ教育活動と共生社会の実現をめざした教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな人生を送るためのコミュニケーション力(気持ちを伝える力)の育成 ・集団での学習経験と障がい者理解を促進するための交流及び共同学習並びに居住地校交流の推進 <p>(4) 特別支援教育の充実、家庭・地域の教育力向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが安心して暮らせる社会にするための家庭・地域支援 ・幼児教育施設や小・中・高等学校への巡回相談や研修会等を通じた地域の特別支援教育の推進

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	経営方針の具現化	本年度重点目標の達成に向けた組織的な取組	本年度重点目標に係る分掌部の課題を解決する。	・目標、進捗状況及び成果の確認・共有のため、関係職員によるコア・ミーティングを実施する。	A	・コア・ミーティングを適宜開催することで、職員の意見を反映した課題解決につなげることができた。
	業務改善働き方改革	事務処理及び授業準備時間の確保	特に、時間外勤務時間が多い職員については、一人当たり平均で年間60時間の時間を確保する。	・非常勤講師、実習教師、特別支援学校サポーター、教育業務支援員の役割分担表を作成し、全職員で共有を図る。また、定期的に見直し、改善を図る。	A	・非常勤講師等の役割分担表に基づく業務の遂行と必要に応じた学部間の役割調整で、教員が授業準備等に充てる時間を捻出することができた。そのため、時間外勤務時間が昨年度より月平均8.5時間の削減となった。
		業務推進の効率化	ICTを活用した確実で、より効率的な情報伝達の方法を確立する。	・Google Chat及びGoogleカレンダーの活用を推進する。 ・ゆうネット等、各種情報共有ツールの特色を生かした活用の推進を図る。	A	・連絡や情報共有等をGoogle Chat等を活用することで、職員一人あたり月平均2時間50分の業務時間短縮につながるとともに、職員の9.5%が業務が改善されたと実感している。 ・一方で、情報量が多く把握しきれないなどの意見も上がっている。今後も引き続き、効果的な活用について模索していく必要がある。
授業の充実	自立活動の充実	自立活動における妥当性のある目標設定	自立活動の目標設定の過程を検討する取組(3年間)の3年目として、目標設定の取組の意義や方法などの定着を図る。	・学級ごとに事例を挙げ、取組の意義や方法を検討する。 ・会議の記録やアンケート調査を基に検討する。	B	・専用のシートに沿って実態把握をしたり、課題関連図の作成をしながら中心的な課題を導き出したりすることで、根拠ある指導目標や指導内容の設定をすることができ

						<p>た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会議の内容をマニュアル化したことで、複数の教師で検討するシステムの構築を図ることができた。 ・自立活動の目標設定の際に各教科等との関連を図ることが不十分であった。実態把握の際に学習上の困難について押さえる必要がある。
		授業の実践を支える取組	授業づくりを支えるための取組を企画・実践する。	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研や教育座談会では、授業について動画を基に意見交換を行う。 ・Google Chat による情報交換「まつしルーム」を通して授業実践の報告や感想等のやり取りを行う。 ・研究授業や授業参観週間を計画し、実際に授業を見合っ意見交換する機会を設ける。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・動画をもとにした話し合いを通して、活発に意見交換を図ることができた。 ・「まつしルーム」に投稿する教師が固定化されていたものの、まとめの時期には、ほとんどの児童生徒の授業の紹介をすることができた。 ・授業参観週間を全学部設定したことで、他学部の様子を知る機会になった。
	まとまりのある教育課程	児童生徒の実態に応じた小中高の系統性のある教育課程の編成	教育課程編成の根拠となる各教科等の年間指導計画の整理と見直しを行う。また、年間指導計画を教育課程編成の根拠として活用する。	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部で作成している年間指導計画の整理を行い、活用を推進する。また、教育課程検討委員会で教育課程編成の根拠として年間指導計画を活用し、小中高の系統性のある教育課程を検討する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・授業カレンダーや年間指導計画をもとに現在の授業時数の過剰分を見直したことで次年度はより標準時数に近い教育課程を編成できた。また次年度、新たな事務整理の時間を追加する等職員の負担軽減につなげた。 ・学校全体や各学部の課題に対する改善案を教育課程検討委員会等で提案し、今後の松橋支援学校に在籍する児童生徒の学びを保障する教育課程の編成を行った。
		個別の教育支援計画、個別の指導計画及び各教科等の年間指導計画におけるP D C Aサイクルを意識した運用方法の検討・改善	賢者システムを使用した個別の教育支援計画、個別の指導計画等の円滑な運用を推進する。また、学校全体でP D C Aサイクルを意識した運用方法を検討する。	<ul style="list-style-type: none"> ・賢者システムの運用方法と教務関係書類の作成スケジュールを示し、P D C Aサイクルを意識した学校全体での運用方法の提案を行う。また、職員のニーズ等を踏まえながらそれらの精査を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・賢者システムの運用や教務関係書類の作成スケジュールについて適切な時期に職員への周知を行い、職員のニーズに合わせた改善を行った。 ・個別の指導計画（後期目標・手立て）の入力〆切を次年度は前期評価とともに作成できるよう、9月末〆切とする。 ・賢者システムでの指導要録作成において、電子押印をするかどうかの検討課題が残った。
キャリア教育(進路指導)	希望する進路の実現する進路指導	自己理解のための進路学習の充実と希望する進路に沿った現場実習	進路面談や拡大サポート会議で進路の希望を把握する。また、関係機関と連携して現場実習先の開拓を行	<ul style="list-style-type: none"> ・現場実習や進路学習を通して自己理解を促す。 ・新入生全員の拡大サポート会議を実施し進路決定に向けた 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大サポート会議や進路相談を実施し、進路希望の把握を行い、施設見学の充実を図った。今後は進路情報の収集や実習

		の実施	う。	方向性を本人、保護者、関係機関と共有する。 ・進路希望に応じた現場実習先の開拓を関係機関とも連携しながら進める。		先の開拓をさらに進める。 ・3年生の進路決定に向けて相談支援員をはじめとして関係機関と連携しながら実習先開拓や進路相談を行うことができた。
		小中高を通じた進路指導の充実	保護者を含め小学部段階からの進路に対する意識を高める。	・小学部から高等部までの長期にわたる学びの記録を蓄積することで、将来の生き方や進路について具体的に考え、自分の適性や将来の可能性について見通しを持つことができるように、キャリアパスポートの見直しを行う。 ・卒業後全般の生活について知るができるよう、卒業生保護者を招いての意見交換会の場を設ける。	B	・各学部で進路学習を図った。高等部の実習報告会への参加や先輩への質問など、学部をまたいだ取り組みができた。キャリアパスポートについては、成長の記録も含めてまとめることができた。 ・保護者会の意見交換会は卒業生の保護者を招いて行うことができた。活発な意見が出され充実した会となった。 ・学校評価（保護者アンケート）では、進路に関する情報提供等について「あまり思わない」との回答が13%だった。今後は、情報提供の方法等について改善を図る。
生徒（生活）指導	校内教育相談体制の整備	校内教育相談への組織的な対応	学部だけでの対応にとどまらず、必要に応じて校内支援委員会の開催など学校全体での対応を積極的に検討する。	・多くの視点で課題を検討するための話し合いを行う。 ・SC活用実施要項を職員に周知し、SC事業の適切な理解と運用を図る。	A	・SC活用要項を定め職員に周知し、適切な運用を図る中で、本校でのSC活用に関する体制を整えることができた。
	交流及び共同学習並びに居住地校交流の推進	障がい者理解を促進するための交流及び共同学習並びに居住地校交流の推進	障がい者理解を促進できるような内容の選定及び相手校の設定を行う。	・事前打ち合わせを入念に行い、実践的な活動等内容の工夫をし、事前事後学習を丁寧に行うことで、充実した取組となるようにする。 ・高等学校との交流の機会を増やし、内容の充実を図る。	B	・クラスルームを活用するなど事前打ち合わせを充実させることで、児童生徒主体の交流を行うことができた。また、共同学習に重きをおいた内容で実施することができた。 ・高等学校の交流先の拡大は日程的に厳しく、現行の交流先との活動の充実を図った。
	児童生徒会活動の充実	児童生徒主体の児童生徒会活動	行事や委員会活動において、児童生徒の活動の充実を図り、学校の一体感や自治的風土を醸成する。	・月に1回、全校委員会の時間を設け、児童生徒が企画運営を行う。 ・行事では、児童生徒が主体となるよう、司会等の役割を用意する。	A	・全校委員会では、児童生徒主体の活動を行うことができた。 ・運動会等の学校行事においても、児童生徒実行委員が中心となった活動にすることができた。 ・学校の一体感や児童生徒の成長を感じることができた。
人権教育の推進	自尊心を育み、相手を思いやる豊かな心の育成	自分らしさを大切に、互いの良さを認め合うことができる心の育成	一人一人が持てる力を発揮して活動に取り組む中で、自分の役割を果たしたり、互いに協力したりすることができる。	・6月「心の絆を深める月間」と12月「人権週間」を中心に、年2回学部ごとに児童生徒の実態に応じた授業実践を行う。また、児童生徒会活動や交流学习等	A	・授業実践は児童生徒の実態に応じて自分らしさを大切に互いの良さを認め合う心を育てることができた。 ・児童生徒会活動では全校委員会を児童生徒会が主体となって行い、互い

				で様々な人と関わる機会を設け、自分のことや友達のことを知り、お互いの個性を尊重し合える学習を設定する。		の良さや頑張りを知る機会となった。
	命を大切に育む指導	生きること喜び、生命を大切に育む心	自分も他者も、それぞれが大切な存在であることに気づき、毎日楽しく前向きに生活していこうとする意識を高める。	・学部毎に児童生徒の実態に応じた日常的な指導を行う。また、ポスター標語等の作品展示による啓発活動を行う。	B	・朝の会や帰りの会で児童生徒同士が互いに声をかけあい、多くの児童生徒が毎日楽しく前向きに生活していくことができた。
いじめの防止等	いじめの早期発見・未然防止に向けた取組の充実	いじめの早期発見及び未然防止の取組	児童生徒の状況を把握できるよう、各学期1回以上のアンケートを実施する。	・「いじめ・なやみ」についてのアンケート（各学期）」「心のアンケート（12月）」を実施する。	A	・学期ごとにアンケートを行い、児童生徒の思いを聞き取り、いじめの未然防止につなげることができた。
		いじめを許さない学校風土の醸成	児童生徒主体で、いじめ防止に関する取組を実施する。	・いじめ防止に向けた啓発活動や集会（年2回）を実施する。	A	・いじめ防止集会を行い、それぞれがいじめを防止する標語等を発表した。いじめを許さない意識を高めることができた。
	いじめ防止への職員の意識向上	いじめに関する正しい認識を基にした適切かつ迅速な組織的対応	児童生徒理解を深めるとともに、いじめに関する正しい知識や対応について理解を深める。	・年2回、いじめ防止に関する職員研修を実施する。	A	・いじめ防止研修を通して、正しい知識や対応を確認した。外部専門家による講習会を開き、知的障がいのある児童生徒のいじめ対応について、理解を深めることができた。
地域支援	特別支援教育に関する理解を促す積極的情報発信	宇城地域特別支援連携協議会及び宇城地域の教育委員会との連携	宇城地域特別支援連携協議会及び宇城地域の各教育委員会からの要請に、COを中心に学部主事等学校全体で連携して応えていく。	・特別支援教育コーディネーター、学部主事等で地域の課題等を共有し、共通理解のもと外部への発言を行う。 ・必要に応じて地域の教育委員会と課題等を共有する。	B	・ミーティングで地域の特別支援教育に関する現状や特別支援連携協議会等の課題について共有を図り、関係機関の要請に応じた対応について検討し、課題解決に向けた対応につなげることができた。
	地域の特別支援教育の推進	積極的な巡回相談の実施	各教育委員会と連携を図りながら、各校（園）への働きかけを行う。	・継続して関わるために訪問後の連絡、聞き取りに努める。 ・巡回相談員会議で、現状や課題を共有する。それらは宇城地域連携協議会に繋げ、圏域全体での特別支援教育に対する理解を促進する。	B	・巡回相談の要請に積極的に応じ、巡回相談員会議で現状を共有した。 ・巡回相談の依頼の手順などに関して理解できていない学校もあった。今後、宇城地域連携協議会を通じて、具体的な手順などを各教育委員会に周知する必要がある。
地域連携（コミュニティ・スクールなど）	学校の取組の情報発信	学校ホームページ及び学校公式SNSによる情報発信	学校公式SNSを開設し、ホームページと共に活用しながら積極的に学校の取組を発信する。	・学校ホームページを計画的に更新するとともに、学校公式SNSの開設及び運用に向けて各方面から情報収集を行う。	B	・分掌部内で計画を立て、ホームページの更新をすることができた。 ・学校公式SNSについては各学部、寄宿舎、事務部及び関係学校等から聞き取りを行い協議を重ね、個人情報の取扱い等から開設には至らなかった。
	地域と連携した学校課題の解決	学校運営協議会での学校課題の検討	学校の取組や課題等を地域や行政・福祉等の関係者の方々と協議するこ	・様々な意見をもらうことができるように、学校の現状や課題について分かりや	B	・授業参観や学校説明を踏まえて協議を行い、本校の強みや課題について多くの意見をもらうこと

			とで解決の方向性を探る。	<p>すく説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防災や共生社会の形成に向けての取組の方向性について、学校、地域、行政の役割の確認を行う。 		<p>ができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決に向けた具体策について十分に協議ができるよう、協議の柱を絞った運営が必要である。
保健安全指導	防災教育の充実と体制の整備	「危機管理マニュアル集」の点検	「危機管理マニュアル集」をPDCAサイクルに基づいて改善・更新する。	<ul style="list-style-type: none"> ・各種避難訓練を実施後、危機管理マニュアル集の改善・更新につなげる。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・体調急変・緊急時マニュアルについて、各学部や関係者で話し合いを重ね、職員が動きやすいように改訂することができた。また、昨今の天気の急変に備えて、年度途中に落雷事故防止マニュアルを作成し、マニュアル集に追加した。
		防災教育の充実	保護者や地域関係者と協力しながら学校としての防災意識を高める。	<ul style="list-style-type: none"> ・避難訓練の事前事後指導を各学部、学級単位で実施する。 ・「まつし防災の日」を企画し、実施する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部、学級単位で取り組み充実した学習を実施できた。また、消防や近隣の小学校と連携を図った避難訓練の実施ができた。
		防災取組体制の整備	本校の防災に関わる業務について、教育、管理、連携を観点として充実する。	<ul style="list-style-type: none"> ・コア・ミーティングを通して、共通理解を図りながら、整備していく。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の防災上の課題等を確認できた。 ・課題解決に向けては、今後も行政に継続的に修繕要望等をしていく。
	安全な医療的ケアの実施	外部機関や保護者との連携の基、実施要項に基づいた円滑な実施	保護者や外部機関との連携を密にし、協力を得ながら、医療的ケアを必要とする児童生徒が、健康に学校生活を送ることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・担任・保護者・看護師で情報交換を密に行い、健康状態の把握に努める。 ・校内の連絡会等で課題の共有を行い、必要時は校内体制の見直しを行う。 ・松橋西支援学校との拡大ほほえみ連絡会の開催方法について検討し、実施する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・登下校時を中心に、健康状態を関係者で把握することができた。 ・各学部会だけでなく、校内・拡大ほほえみ連絡会でも広く意見やアドバイスをいただくことができた。 ・オンラインで開催することで2校同時に参加でき、滞りなく会を実施できた。
情報教育	ICTを取り入れた授業の充実	積極的なICT活用による学習支援の工夫	ICT機器を活用した授業実践、及びICT機器の有効的な活用について情報共有を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器基本操作に関する研修を実施する。 ・校内のICT機器等を整備し、使用方法等について周知する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・Google スライドやKME、動画編集についての校内研修を行った。また、パソコン室内の機器を整理し、機器の紹介スライドの作成・周知を行ったことで、授業で生徒と動画編集をするなどのICT機器を活用した事例も多く出てきた。
寄宿舎指導	安全・安心な寄宿舎生活の充実	毎日が楽しいと思える	定期的に年間行事（季節の行事、誕	<ul style="list-style-type: none"> ・男子棟、女子棟の共働に努め、生活部 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・係を中心に、月に1回の誕生会や七夕飾り等の

	寄宿舎づくり	生会、レクリエーション等)を実施する。	を中心に月に1回寄宿舎全体で取り組む。 ・買い物体験、ポッチャ大会等の企画を立案する。		季節行事、新たにハロウィンパーティー、スタンプラリーを計画し実施した。寄宿舎全体で取り組むことで、一体感を高めることができた。 ・校内に寄宿舎掲示板を設けたことで、生活の様子や取組の様子を紹介することができた。
	仲間とともに協力し生活を送る中で、お互いの良さを認め合う楽しい寄宿舎づくり	年間に3回以上、人権教育を実施するとともに、当番活動を通して仲間意識の醸成に努める。	・研修情報部が立案し、学期に1回寄宿舎全体で取り組む。	A	・年間5回の人権教育を実施した。 ・児童生徒は、これまで以上に、お互いを気遣ったり、助け合ったりするようになった。

4 学校関係者評価

学校評価アンケートから（回答数 保護者：30人/34人、職員：64人/67人）

・全体として、教育活動への評価は昨年度に引き続き高い水準にある。一方で、進路指導や環境整備においては、課題があることが明らかになった。

【成果】

・「児童生徒が楽しんで学校に通っている」との回答は、職員98.4%、保護者90.0%と高い数値を維持している。特に「個別の指導計画の活用」（保護者93.3%/昨年度比+4.0pt）や「個に応じた指導」（保護者96.7%/+0.3pt）、「ICTの活用」（保護者90.0%/+0.7pt）など、日々の授業や支援に関する項目では昨年度を上回る評価となった。

・特に、今年度の「創立60周年記念行事」や「きらり祭」は、児童生徒の成長と地域・保護者との連携を深める機会として、高く評価された。

【課題】

・「進路に関する情報提供」について、職員の自己評価は92.2%（+7.3pt）と向上したものの、保護者の評価は76.6%（-19.8pt）と低下した。

・「校舎内外の環境整備」については、保護者評価は83.3%（-9.5pt）と低下している。

・「働き方改革」への肯定的な回答は79.7%（+2.4）であり、業務の偏りや、大きな行事に際しての疲労の蓄積が挙げられた。

【今後に向けて】

・引き続き、児童生徒一人一人に寄り添った丁寧な指導を行い、教育活動の充実を図っていく。

・進路情報については、小学部段階からの情報発信に努めると共に、保護者との個別懇談等の際にも話題にし、児童生徒の将来を見据えた教育活動をしていく。

・老朽化対策や安全確保については、引き続き関係機関と連携し、改善を図っていく。

・教職員の「働き方改革」に関しては、業務の偏りを是正するため業務分担を調整し、教職員が心身ともに健康で、児童生徒と向き合う時間を十分に確保できる体制づくりを推進していく。

5 総合評価

【主な成果】

・「働き方改革と組織運営」：ICT（Google Chat等）の活用による情報共有の効率化が進み、教職員の業務時間が大幅に短縮（月平均85時間の削減事例あり）できたことで、児童生徒と向き合う時間の確保につながった。また、コア・ミーティングの実施により、職員の意見を反映した課題解決につなげることができた。

・「児童生徒主体の活動」：創立60周年記念行事や「きらり祭」、児童生徒会活動において、子どもたちが主体的に役割を果たす姿が見られ、保護者・教職員双方から高い満足度（「楽しく登校している」保護者90%以上）を得ることができた。

・「自立活動の専門性向上」：3年計画の最終年として、実態把握に基づく根拠ある目標設定のマニュアル化が進み、特別支援教育の質の担保を図ることができた。

【課題】

・「進路に関する情報提供」：教職員側の自己評価に対し、保護者の「進路に関する情報提供」への評価が低下（76.6%）している。小学部段階からの丁寧な情報発信と、個別懇談等を活用した進路に関する意識向上を図る取組が必要である。

・「環境整備と安全確保」：校舎の老朽化対策について保護者の懸念が見られる。今後も行政への働きかけを継続するとともに、地域や学校運営協議会とも連携して安全な教育環境の維持が必要である。

・「地域連携」：共生社会の実現に向け、交流及び共同学習を推進していくとともに、地域との交流についても継続した取組が大切である。地域の特別支援教育の推進をする拠点校としての役割をさらに強化していく必要がある。

6 次年度への課題・改善方策

○保護者とのニーズの共有と進路指導の充実

【課題】進路に関する保護者評価が低下しており、学校側との認識の乖離が見られる。

【改善方策】高等部だけでなく、小学部・中学部段階から卒業後の生活を見据えた情報提供（卒業生保護者の講話や施設見学の早期案内等）を強化する。また、個別懇談において「キャリアパスポート」をより積極的に活用し、将来の可能性について家庭との共通理解を深める。

○ICT活用の質的向上と情報発信の最適化

【課題】ICTによる業務効率化は進んだが、情報過多による把握不足に課題が残った。

【改善方策】共有ツール（Google Chat等）の運用ルールを再整備し、情報の精査・整理を行う。

○地域と共にある安全で安心な学校づくりの推進

【課題】校舎の老朽化対策や共生社会の構築に向けた交流及び共同学習の更なる推進が必要である。

【改善方策】施設の修繕等については、継続的に行政へ働きかける。交流及び共同学習においては、共同学習に重きを置いた内容となるように、交流相手校との目的の共有や活動内容について丁寧に打ち合わせ等を行い実施する。